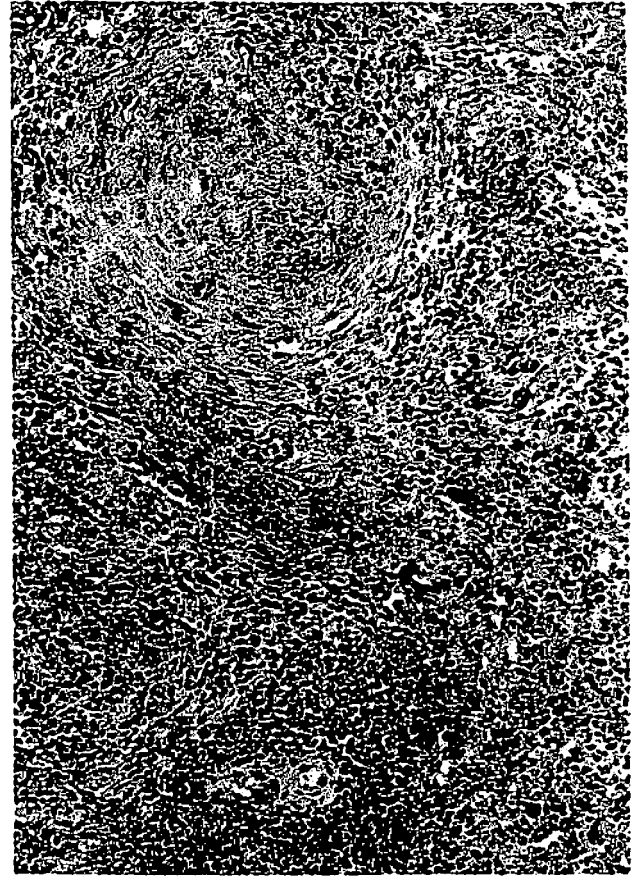
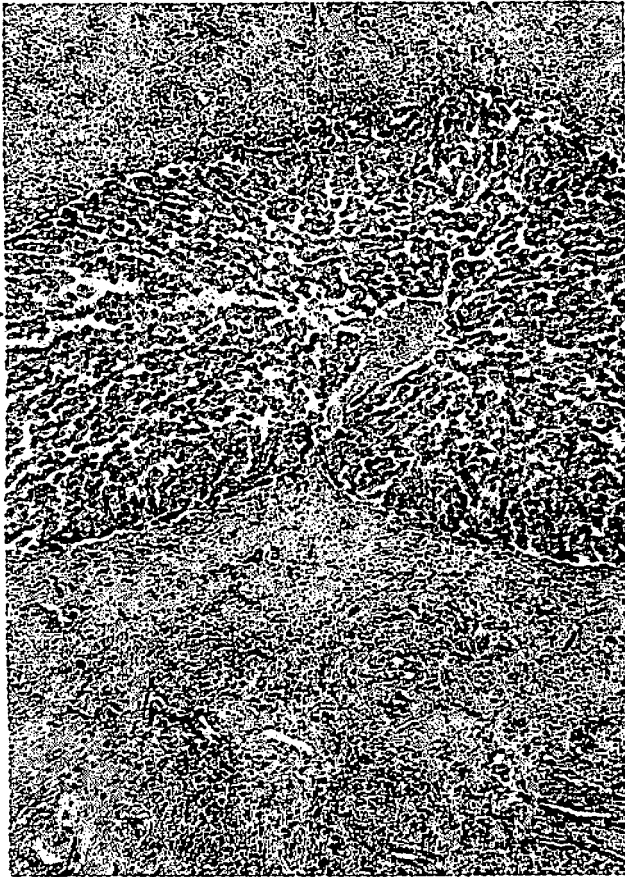


豚の肝線維症：骨髓様化生を有するうっ血性脾線維症を伴う

酪農学園大学獣医学科家畜病理学教室 第15回獣医病理研修会標本 No.226



愛知県産，1年後札幌近郊養豚団地に導入，2年間種牡豚として使用された体重200kgのハンプシャー種。2ヵ月前より軽い嘔吐症状あり，元気がなく，受胎率低下，一週間前より食欲不振，体温38.5～39.0℃持続。'74年11月1日と殺。栄養状態良好。配合飼料給与。

肝：大きさ60×40×17cm，12kg重。分葉の状常。包膜肥厚するが略滑沢。硬度鞏，刀割抵抗あり。剖面平滑，実質は島状に点在し，灰白色間質高度に増生する。

組織学的：実質は小葉単位性に散在し，小葉間結合織は高度に増巾するが，肝細胞索間への線維の侵入は認められない。中心静脈壁は肥厚し，周囲結合織と連続する像頻発する。再生性偽小葉形成は否定的である。肝細胞の小巣状壊死稀に見られるが，これは線維増生による二次的なものではないか。増巾した結合織内に，屈曲した走行を示し，壁の厚み不整な門脈枝が多く認められるが，肝動脈枝の変化は軽度である。偽胆管形成は認め難い。又間質に高度の好酸球浸潤があり，それは実質周囲に概して密で，線維性基質が主体を占める所では粗である。部位により幼若好酸球が目立つ。

脾：腫大，長さ約1mに達する。重さ2.2kg。剖面膨隆し，粗大顆粒状隆起密在する。

組織学的：脾は萎縮性で散在する。中心動脈壁肥厚

し，外膜位に膠原線維増生する。赤髄は概してうっ血性，格子状線維びまん性に増生し，膠原線維は主に小動脈周囲性の不規則斑状の拡りを示して増生する。脾柱内動脈周囲にも膠原線維増生する。赤髄には又，骨髓巨細胞の散在，粗剛不整核をもつ骨髓系細胞，幼若好酸球，濃縮核をもつ小型の赤芽球系細胞の小集簇など骨髓様化生認められる。

第13回研修会鹿児島大提出 No.195「豚の肝線維症を伴った脾線維症」と比較すると，両臓器の線維化の外，好酸球浸潤，脾の骨髓様化生など共通所見を有するが，線維化の程度は両者逆であり，かの例では脾の，この例では肝の線維化が高度である。原因的に同一疾病と見なして良いのかどうか不明である。少くも我々の例では脾維化は肝病変よりきた門脈性うっ血の二次的変化と考えた。このような豚のパンチ症候群様所見は，各地と場でかなり発見されつつある。

写真 (A) 肝。小葉中心静脈壁肥厚，増生した葉間結合織と連絡。下半分に門脈枝目立つ。浸潤細胞は好酸球。H. E.，×48。(B) 脾。脾動脈(下)中心動脈肥厚。脾動脈(上)周囲線維化。巨細胞および赤芽球小結節散見される。H. E.，×126。